



外国語学習に対する意欲 (WTC) を高めるためのICTや生成AIに着目

講師 四戸 聡美

■ 研究分野：英語教育、第二言語習得（個人差要因研究）、応用言語学、ICT教育

■ 研究キーワード：コミュニケーションを取ろうとする意欲 (WTC)、言語不安、英語学習経験、学習目標、e-Learning、生成AI

研究内容

第二言語習得とは、母国語（第一言語）の次に学習する言語（第二言語・外国語）の習得に関する学問です。外国語としての英語の習得に影響を与える個人差に着目することで、英語学習者のよりよい学びと学習意欲の向上に向けた糸口を探っています。

これまでの先行研究では、コミュニケーションを取ろうとする意欲 (Willingness to Communicate: WTC) が高い学習者ほど、外国語を習得しやすくなると考えられてきました。昨今の日本国内の英語教育において、学習者が英語によるコミュニケーション能力を身につけることは、非常に重要な到達目標です。こうした背景から、英語でコミュニケーションを取ろうとする意欲 (WTC) を高めることが必要とされています。本研究では、WTCを向上させるために必要となる要因を過去・現在・未来の時間軸から検討しています。具体的には「過去のコミュニケーションにおける成功体験と失敗体験」「未来に向けた目標設定」「WTCの向上」の3つの観点から、研究を進めてきました。研究成果として、過去の学習経験が肯定的にも否定的にもWTCに影響を及ぼすこと、また各自のレベルに合った具体的な目標設定をすることでWTC向上に寄与することが明らかとなりました。

私が受け持つ授業では、学生のコミュニケーション意欲を高めることを念頭にICTやe-Learning教材、生成AIを積極的に導入することで双方向的なコミュニケーションを促しています。特に生成AIの教育利用の効果の測定については、今後の研究課題としていきたいと考えています。

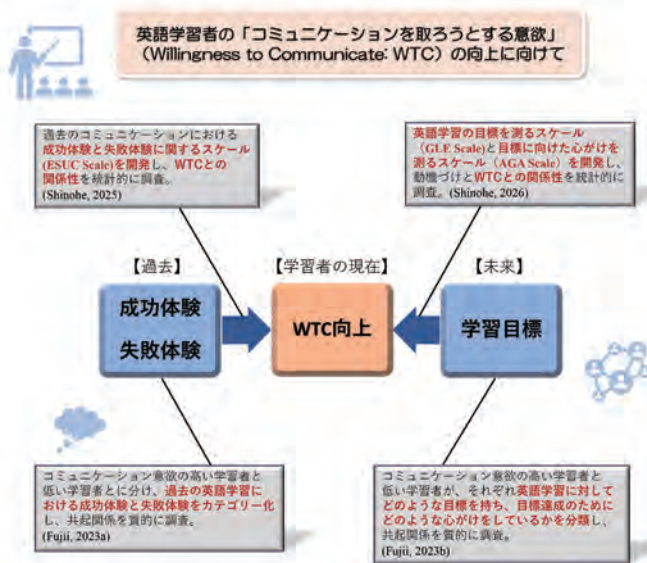


図. 日本学術振興会 科学研究費助成事業 若手研究 四戸 聡美 (藤井 聡美) 「日本人英語学習者の『コミュニケーションを取ろうとする意欲』の向上に向けて」 概略図

社会実装の可能性

英語学習者のコミュニケーションを取ろうとする意欲 (WTC) を向上させることは、大学の授業の枠組みを超えて、将来社会でグローバルに活躍する人材を育てる上でも有益であるといえます。

研究の意義

本研究では、英語学習者のコミュニケーションを取ろうとする意欲 (WTC) の向上に何が必要となるのかを明らかにすることで、効果的な英語授業の実践方法を提示し、本学学生に対して行う英語指導の改善につながることを期待できます。

地域社会へのアピールポイント

個人差要因研究では、一人ひとりの学習者の特性を情動的（動機づけや不安など）、行動的（学習目標など）、認知的（学習スタイルや能力など）側面からとらえることを目指します。同じ学習環境の中でも、学び方は人それぞれです。そうした個人差に着目することは、近年文部科学省が提唱している学習の「個別最適化」を進める上でも有効な手立てです。

近年の研究では特に、個人差は状況に応じて変化するものであると捉えることが主流になりつつあります。したがって、学習者が安心して英語を学べる環境を提供し、かつ意欲的に取り組める授業づくりをすることが、私たち教員には求められています。

今後の展望

今後は、英語学習者のコミュニケーションを取ろうとする意欲 (WTC)、過去の学習経験、そして未来に向けて定める目標、これら3つの概念の間の相互の関係をモデル化することを目指します。過去・現在・未来の時間的枠組みの中での本研究の仮説の一つのモデルとして証明できれば、今後のWTC研究の一助となることと思います。

また、英語学習者のWTCの向上のために教員が授業内でどのような教育的アプローチを図ることができるのか、という新たな視点から、ICTや生成AIを導入した双方向型授業がもたらす効果についても今後は検討していく予定です。